〈東亜同文書院大学記念センター公開講演会〉

上海交通大学史の編纂をめぐって

上海交通大学校史研究室　葉　敦平

【司会】 こんにちは。ちょうど時間になりましたので、本日の東亜同文書院大学記念センター主催の講演会を始めさせていただきます。幸いなことに今日はなかなか良い日でございまして、暖かいので大変ありがたく思っております。本日の講演は、画面にも映っておりますけれども上海交通大学の校史編纂室の総まとめ、その編集長をやっておられます葉敦平先生であります。葉先生は中国の人民大学で哲学の勉強をされたあと、いろんな大学を卒業されまして、現在は上海交通大学におられますが、中国の各大学関係者の方々と非常に面識の豊かな先生です。お人柄も含めて全国各地の大学の関係者には葉先生のファンがたくさんおられます。葉先生は数日前の１月27日（水）に、東京で第16回の東亜同文書院記念基金会の表彰を受けられました。正式には東亜同文書院記念賞と言います。

皆さんご存じのように東亜同文書院と上海交通大学はある時期隣同士に立地しておりましたが、1937年に日中戦争が始まって以来、東亜同文書院が上海交通大学の建物敷地等を使う時代がございました。それはそれぞれの歴史の中で非常に気になる大きなできごとでございます。現在交通大学史の編纂事業が進んでいる中で、そのことも踏まえながら、東亜同文書院が中国の中でどういう存在であったのか、あるいはどういう形で日中関係に関わってきたのかというようなことも含めまして、今から５年ほど前になりますか、日本と中国の、とりわけ中国では上海交通大学の関係の先生が多かったんですけれども、東亜同文書院をめぐる、イデオロギーではなく歴史的な史実に基づいた研究をしましょうというプロジェクトが立ち上がりました。この背景には東京の霞山会の北川理事長を中心とした方々の大きな功績と、それに応じていただいた葉先生の功績が非常に大きかったわけであります。

数年間日本と中国との間で東亜同文書院に関する調査研究が行なわれました。その時に中国側の代表で葉先生にまとめ役をしていただきました。日本側は私がやったわけですが、その成果を上海交通大学でシンポジウムという形で、70～80人ぐらいの参加者の前で行ないました。その成果を愛知大学でも皆さんに聞いていただいたほうがいいだろうというわけで、そのあと愛知大学でも同じようなシンポジウムを開きました。併せて中国にあります東亜同文書院関係の資料類を、非常に積極的に収集していただきまして、270～280頁の資料選集というのを出版していただきました。これは非常に貴重でして、これまで我々が知り得なかった中国での東亜同文書院の存在、中国との関わり、とりわけ交通大学の学生諸君と書院の学生との間に非常に密接な繋がりがあったというのはあまりきちんと知られていなかった点でありますけれども、そういうような諸資料も含めて資料選集を出していただきました。そういう点で東亜同文書院記念会といたしましても充分表彰に値する

ということで、この27日に東京で表彰式が、書院の卒業生の方々を含め50人余りにご出席いただいて盛大に行なわれました。今回はせっかくの機会ですので、愛知大学までいらしていただいて、現在進行中であります上海交通大学史の編纂をめぐってお話をしていただきたいと申し上げましたら、快く引き受けてくださいました。

というこれまでの経過がございまして本日の講演会に到ったわけであります。前置きが長くなったかも知れませんけれども葉先生のご講演に移らせていただきます。葉先生、よろしくお願いいたします。

【葉】 皆さんこんにちは。私は共同研究を通じて藤田先生と非常に長い付き合いがあります。今回愛大を訪れるのは2回目であります。またこういう機会を設けていただきまして本当に心から感謝を申し上げたいと思っております。今日は上海交通大学の校史の編纂についての問題を取り上げて皆さんと話し合いたいと思っております。

今日の話には主に2つのテーマがありますが、第1のテーマは上海交通大学の状況についていろいろ説明したいと思います。上海交通大学の最初の名前は「南洋公学」と言いまして、1896年に創設されました。中国の大学の歴史では、主に2つの大学を近代的な大学として位置づけております。その1つは天津にある「天津大学」で、当時の名前は「北洋大学」です。天津大学の前身校である北洋大学は1895年の10月に天津に創設されました。

上海交通大学の前身校である南洋公学は、それからちょうど半年後の1896年4月に上海に創設されました。上海交通大学の名前になぜ「交通」と入っているかについて多くの方々が疑問を抱いております。

まず学校の名前から説明したいと思います。上海交通大学の創設当時は交通に関わる専門科目が多かったんです。たとえば鉄道線路とか。交通大学は交通部という上の機関が直轄していました。卒業生の多くが交通部門に就職していることから、交通大学という名前を使うようになりました。ということで交通大学という名前が今まで続いております。それから単なる交通だけじゃなくて、航空技術とか船舶とか、そういう専門科目も設置されるようになりました。現在でも交通大学と言えば交通と関わる専門的な大学という誤解が多いかも知れませんが、実はそうではなくて、多くの専門を設置する総合的な大学です。

交通大学という名前ですが、現在の正式名称は上海交通大学です。次に、この上海交通大学についてもいろいろ話すことがあります。昔は交通大学という名称でしたが、1957年、交通大学は上海と西安の2つの部分に分設されるようになりました。

当時の国防的な関係で言いますと上海は沿海地域でありまして、戦争が起こった時に被害を受けることになるから、一部を奥地の西安に移したわけでございます。そのために一部の教員と学生と教材の設備を西安に移したんです。当時の名称は交通大学の上海に残った部分は上海部分と言いまして、西安に移した部分は西安部分という名称を使っておりました。学長は1人で、卒業証書も前と同じように交通大学でありました。

1959年になりますと、交通大学の上海部分を正式に上海交通大学という名前にしました。西安部分は西安交通大学となり、1つの大学が2つの大学になったわけです。今は上海交通大学と西安交通大学という2つの大学です。

現在中国で交通大学という名前を使っている学校は全部で5つあります。それは上海交通大学、西安交通大学、四川省の成都にある西南交通大学、北京交通大学、大陸以外に台湾の新竹にある新竹交通大学の5つです。これらの5校は全部上海交通大学とつながりを持っておりまして、特に新竹交通大学は上海交通大学の卒業生が新竹に作った新しい交通大学です。この5つの交通大学は関わ

りを持つんですが、それぞれ独立した大学です。毎年この5つの交通大学の学長協議会を設置していますが、それ以外の部分は全部独立したものです。ということで、交通大学というのは中国では非常に影響力を持つ名称でありまして、多くの学校が交通大学という名前を依然としてそのまま残しています。

今の上海交通大学がどのような専門科目を設置しているかについて説明したいと思います。今の上海交通大学は4つの専門ブロックを設置しています。1番目は理工系で、その中に船舶機械、電子（エレクトロニクス）、これはソフトウェアの材料などの専門科目があります。理工系の中で一番有名な専門は、船舶の中の商船です。上海は海の近くにあるので海運業が盛んで、商船の専門が非常に力を持っております。ちなみに、中国の最初の商船製造工場である「江南造船」は上海にあります。その工場の中の工場長とかエンジニアとか、あと設計している人とか、みんな交通大学の卒業生であります。商船以外に建築とか、土木建設とか、そういう専門も非常に力を持っています。20年代の土木工事の専門は上海交通大学が非常に強かった。それ以降は中国各地に分散するようになって、その地位を保つことはできなくなった。

もう1つ、機械動力というのは上海交通大学の伝統的な専門であります。最近になって一番力を入れてるのは電子テクノロジーの分野です。電子テクノロジーの部分では、全国的に有名ないくつかの大学の中の1つです。昨日東京で日中大学フェアとフォーラムが開かれましたが、そこに招聘された上海交通大学副学長の張さんは電子テクノロジー学部の出身であります。ここに挙げている商船・機械・電子・ソフトウェア以外では、理科とか数学も非常に力を持っております。

2番目の特徴ある専門分野は生命科学と医学のほうですね。上海交通大学はもともと医学という専門を持ってなかった。上海第2医学院を吸収したあとに、上海交通大学医学部を設置したのであります。それに伴って医学専門も全国的に有名になりました。あと薬学もありますね。

3番目としては生物と農業です。これももともと上海交通大学に農業の専門はなかったんです。上海農学院を吸収したあとにこういう専門を設置するようになりました。ここで特に強調しておきたいのはこの4番目の人文科学です。文系のほうですね。この分野において、今後、愛知大学との交流が盛んになっていくんですね。

以前は上海交通大学は理系あるいは工学系の大学という認識がありましたけれども、最近になって文系の科目設置、あるいは教育とか研究に力を入れていることで、文系の部分の成長が非常に著しく、その文系の中でこれは管理と書いてありますが、経営（マネージメント）、法学、人文とか、あとはメディアとかデザインとか、工業生産とか、いろんな専門を設置しております。

文系の基礎的な専門の設置も整っております。たとえば哲学とか中国語文学とか、あと歴史とかの専門を設けるようになりました。特にこの中では交通大学の法学、法律のほうは非常に強いです。今の法学院の院長は日本から来た学者です。

外国語教育では日本語の教育にも非常に力を入れており、多くの教員は日本留学の経験を持っております。今までお話ししたように上海交通大学は単なる交通だけの大学ではなく、あるいは工学だけではなく、文系も入れた総合的な大学です。現在上海交通大学は3つの目標、スローガンを掲げています。1つは総合性を持つこと、もう1つは研究型、さらに最後は国際化した総合大学をめざしております。

研究型について言えば、ただ学部生を育成するだけではなくて、主に大学院生の育成、若手研究者の育成に力を入れております。現在は170の博士課程と270の修士課程の専門を設置しております。さらに、若手研究者を育成するためのポストドクターステーションは26の専門を持っています。教員数は3,000人ぐらいで、全部で50,000人ぐ

らいの学生数を持っています。

20,000人ぐらいが学部生、20,000人ぐらいが大学院生、4,000人ぐらいが留学生です。

先ほど申し上げたように農学院と医学院を吸収したあとに、現在は全部で5つのキャンパスを持っております。全体の面積は5,000ム、約330ヘクタールぐらい。けっこう広い面積を持ってます。

また、先ほど申し上げた3つの目標の中で1つは国際化の戦略です。国際化を実現するためには海外の大学との交流を促進しないといけない。海外で協定を結んでいるのは136の大学で、一番多い国はアメリカ、その次が日本です。日本では21の大学と協定を結んでおります。愛知大学もそのうちの1つです。

私は愛知大学と上海交通大学の交流・友好関係がさらにステップアップすることを確信しております。昨年に愛知大学の佐藤学長と交通大学の張学長の対談がありまして、2つの大学の交流を促進するための話し合いがなされたようです。その中で1つ構想しているのは、愛知大学が上海交通大学に事務所を設置するということです。

上海交通大学と愛知大学の関係は非常に歴史が長いですね。次に、その関係について若干触れておきたいと思います。

愛知大学の前身校は東亜同文書院でありまして、東亜同文書院は上海交通大学といろんなつながりを持っております。20年間隣同士の関係でした。東亜同文書院は南京に創設され、そのあと上海に移った。さらに上海の中の虹橋路に移ったあとは上海交通大学のすぐ隣にありました。

その時の学生間の活動は非常に盛んでした。互いに交流したりいろんな活動に参加したりして。時代背景から見ますと、20世紀の初頭には中国共産党はまだ合法的な組織ではなかった。その時学生の運動は主に同文書院の学生と連携しながらやっておりました。

東亜同文書院はご存じのように日本の学生だけではなく中華学生部を設置したことがあります。中国人学生が入学することによって学生間の交流はさらに盛んになりました。

東亜同文書院が1917年に虹橋路に移ったあと、37年に日中戦争が勃発するまでの20年間というのは非常に関係が良かったことが、藤田先生との共同研究によって実証できました。

しかし、1937年以降非常に残念なことになりまして、その関係に少し変化が見られるようになりました。というのは、上海交通大学の校舎は日本の憲兵隊に占拠されることになります。その後、東亜同文書院の校舎が焼かれて、長崎に一時期移転することになりました。のちに、東亜同文書院は再び上海に戻ってくることになりますが、もともとの校舎が焼かれたので、どこで大学を存続するかというのが課題になっておりました。

その時に憲兵隊に占拠された交通大学が候補になったわけであります。外務省と軍部にお願いして借用することになりました。そして、上海交通大学の看板を外して東亜同文書院の名前にしたことについて、多くの人が不満を感じました。

こういう歴史がありましたけれども、これはすでに過ぎてしまったことです。東亜同文書院の卒業生の多くの方々はその後上海交通大学を訪ねてきて、日中関係の改善とか、日中友好のために力を注いだのです。彼等が望んでいるのは日中間の真の友好関係です。

愛知大学は日本での日中友好促進する大学の中で非常に有名な大学でありまして、我々の交通大学も愛知大学と友好関係を保つことで、日中関係の改善や日中友好のために少し貢献できたらということを望んでおります。

上海交通大学のいろんな状況・概要は私が話したい第1点です。次に話したいのは上海交通大学の校史の編纂についての幾つかの問題点です。

大学史の研究というのは、日本は中国より遙かに進んでおります。現在中国の上海、あるいは全国の有名な大学は自分の大学の歴史についての研究が非常に盛んに行なわれております。

我々は校史の研究あるいは編纂というのは非常に重要な意味を持つ作業であると思っています。校史の編纂あるいは研究は、３つの意義を持っていると思います。

第１、大学の高等教育と大学の発展のために、大学の歴史を踏まえた上で発展のビジョンを設定するのに非常に参考になる部分が多いと思います。交通大学について言えば、３つの時代にまたがっています。清朝・中華民国・中華人民共和国の３つです。世紀も３つにわたっています。設置したのは19世紀の末で、今は21世紀ですから。設置した当時は19世紀の末で、ご存じのように中国は清王朝ですから、皇帝の許可をもらわないといけない。その次は中華民国と中華人民共和国という、３つの時代を経ております。３つの世紀にまたがっております。このような長い間の歴史的な経験ならびに教訓は非常に価値のあるものだと思っております。

第２に、大学史の研究というのはその大学の文化・学風を作るのを非常に促進する役割を持っていると思います。交通大学の文化をいくつかまとめたことがあります。まず中国の古いことわざで、「水を飲む時に井戸を作った人の苦労を思ってください」というのがあります。それが１つ。もう１つは祖国を愛する。母校が栄えるというのがもう１つの文化ですね。いつも先端を走るというのは、交通大学の１つの文化ではないかということですね。このような歴史的なまとめは、大学の１つの文化を作るのを非常に促進する役割を持っていると考えております。

第３は、大学の理念や特色を出すためにも、校史の研究は非常に重要でありまして、現在交通大学の特色をまとめますと、スタート時点が高いというのが１つの特徴です。もう１つは教育の基礎が厚い。厳しさを求めて実践を重んじるというのが交通大学の特色であります。

ここでは１つの例を申し上げます。私の知ってる有名な哲学の先生が1944年に交通大学を受験した時、国語の問題が非常に難しくて、テーマは「仁は人の安定であり、義は人の進むべき道である」という題の論文でした。もう１つの科目は英語で、中国の「桃源郷」という古典を英文に訳しなさいという出題でした。当時の上海交通大学の学部受験にこんな難しい問題があったのを見ますと、基礎を非常に重視するというのは上海交通大学の１つの特色ではなかったかと思っております。

これらのことで校史の編纂と研究についての重要な点を述べたのでありますが、次に校史の編纂についての考え方を若干述べておきたいと思います。

上海交通大学は114年の歴史があるんですが、校史を編纂する上では110年間の歴史を書かないといけないんですね。

そこで、第１にぶつかるのは、校史の時代区分の問題です。我々は上海交通大学の歴史を概ね８つの時代に区分しております。

ここに書いてある８つの時代区分です。１番目は南洋公学時期。これは1896年から1905年までです。この時代には小学校・中学校・高校と学部を持っておりました。日本の近代教育も受け入れて師範学校も設置しておりました。師範学校の設置は日本の経験を真似して設置したのでありますが、中国で最初の師範学校を設置したのがこの時代でした。

２番目としては工学大学を創設する時期です。1906年から1920年までですね。鉄道とか交通とか、工学系の専門がこの時期に設置されました。

３番目としては理系と工学と管理（マネージメント）を結合した工学専門を設置した時代ですね。これは1921年から1937年の間です。この時代には工学だけではなくて理系も設置し、さらにマネージメント学科も設置したのが最大の特徴であります。この時代には正式に交通大学という名前を付けました。同時に、この時代は、上海交通大学の黄金時代と言われております。さらに言えばこの時代はアメリカのマサチューセッツ工科大学に因

んで「東洋のMIT」と呼ばれていました。孫文の息子である孫科も上海交通大学の学長を務めたことがあります。

4番目としては戦乱の中の苦難期ですね。これは1937年から1949年までです。この間には2つの戦争がありました。1つは日中戦争。中国側からは抗日戦争ですね。もう1つは45年から49年の間の共産党と国民党の国共内戦期です。この2つの戦争があったことで非常に苦難に満ちた時期でありました。この戦争の中で上海交通大学は校舎を上海市のフランス租界に移したり、重慶に移したり、転々としていました。

5番目としては1949年から59年までの時期ですね。この時期は新しい中華人民共和国が誕生したばかりで、設備や経費が足りなかった時期でありました。この5番目の時代までは交通大学でした。59年からは上海交通大学として正式にスタートすることになります。

6番目の59年から78年までは、10年間の文化革命のあった時代でもあり、非常に大学の発展の足枷になった部分が多かったと思います。

7番目は文化革命が終わったあとから1991年までの時期です。

最後は現在までの上海交通大学の時代でありまして、先ほど申し上げたような3つの目標を掲げる国際化した世界一流の大学をめざしております。

これは上海交通大学の110年の歴史を時代区分として分けたのでありますが、これに関しては国内のいろんな研究者や学者の間にさまざまな意見があります。

第二に、話したいのは校史編纂についてです。幾つかの要素を整える必要があると思いますので、それについて話していきたいと思います。

まず第1に学校発展の沿革です。これが1つの要素、もう1つは教育と教学、次は科学研究、教員の育成、学生のマネージメントと大学の文化。次は学校を保障する役割。こういうのが編纂に関わる幾つかの要素ではないかと思っております。第三に、校史は歴史の真実を記録するのが一番大事なことであるということです。

上海交通大学の校史は110年間という長い歴史でありますが、その歴史の真実を見つけるためにたくさんの資料を収集しないといけない。収集した資料の信憑性を一々確認しないといけない。これらの作業は非常に困難でありまして、多くの仕事の内容は資料の整理と、その信憑性を高めるための作業です。その中で1つ心がけていることは、大きなことを強調することと、重要なことを漏らさないようにすることです。

第四に、校史であるからには教育が主要なテーマでなければなりません。長い教育の歴史の中に連続性があることが非常に大事です。良かった経験、あるいは不足しているところ、それらを全部検討することが大事であります。記述は正確であり、人物評価は客観的にしないといけない。

第五に、校史というのは単に出来事について書くのではなく、一番重要なのは人物を書くことであります。人物というのは学長であり、教員であり、さらに学生もその中に含まれます。上海交通大学の114年の歴史の中で計49人の学長がおりました。この49人の学長についてそれぞれ書かないといけない。49人の学長の中にも、ばらつきがありまして、最長で13年間学長を務めた人物もいれば、数か月で退任する人もいる。さらに学長という名前で実際には何もやってない学長もいます。その中で一番長かったのは、第13代目の学長である唐文治という人物です。彼の教育の目標は「一流の人材と一流の品格」です。才能と品格を持っている人材を育成することを第1の目標に掲げていました。つまり、一流の人材はやはり一流の品格を持たないといけないということですね。一流の人材は才能だけではなくて、教養とかいろんな面での素質を高めることで、さらに国民や祖国のために自分の力を注ぐことができるのではないかと考えました。これが一番長かった唐文治学長の

像です。

この唐文治という先生は、後になって失明しますが、それにも関わらず学生に訓示をしました。要は人材はとりあえず自分の才能を磨くことが大事ですが、一方でどうやって人間として育っていくか、その大事さを学生達に伝えました。

このような例がありまして、49人の学長をどのように正確に客観的に評価するかというのは非常に難しいことであります。

学長はもちろんのこと、有名な学校には必ず有名な教員がいないといけない。これは1つの条件であります。我々がしたのは有名な教員の人名録を作って、それを相次いで出版することです。宣伝効果もあるし、大学にとっても非常に価値のあるものです。有名な教授の名前を載せて、その業績や簡単な紹介を載せて出版するのは非常に大事なことであります。

学長と教員だけではなく、学生についても書かないといけないですね。つい最近亡くなられた、中国で有名な航空分野の専門家であった銭学森も交通大学の出身であります。中国の主席を務めていた江沢民もこの交通大学の出身であります。このように、科学者や教授にも交通大学の出身が多いです。

校史の編纂の中で、人についての記述は非常に大事なことだと思います。上海交通大学は各地に同窓会を設置しています。改革開放以降初めて海外との交流を行なったのも上海交通大学でした。代表団を派遣してアメリカとの国際交流を行なったのは交通大学です。当時は冷戦状態ですから、アメリカとの交流は非常に難しい面を持っていました。いろんな連絡業務をやってくれたのは全部同窓会でした。今は交流は簡単なんですけれども、当時は非常に難しかった。その中で同窓会というのは大きな役割を果たしました。

これらは私達上海交通大学の110年ぐらいの歴史を編纂する中で直面する問題をいろいろ考えた、あるいは書く内容についての私なりの考え方でありますが、これが本当に正しいかどうか、また不足している部分があればぜひ皆さんのご意見を伺いたいと思います。

そして、次に校史編纂の中で直面する幾つかの課題について触れておきたいと思います。

まず最初に資料の問題です。

校史と言っても歴史ですから、まず一番重要になってくるのはやはり資料です。資料がなければ良い歴史は書けません。我々は3年間の時間をかけて資料収集に努めました。校史を書く時は、まず歴史に対して責任を持たないといけない。次に社会に対して責任を持たないといけない。最後に読者の皆さんにも責任を持たないといけない。資料はまず公正さと、あとは信憑性ですね。たとえば回想録は正確さに欠ける部分も多々あります。もう1つは「档案資料」と中国語では言うんですが、日本語では公文書ですね。その資料を使うことです。もう1つは新聞とか雑誌の資料を使うことです。あとはインタビューです。元教員とか元学長とか、彼等をインタビューすることで資料の記録を残すことができます。

繰り返しになりますが、校史を書く上で非常に難しいことはやっぱり資料の問題ですね。たくさんの資料を集めることと、その信憑性。偽りがあるかどうかを判別することも非常に重要なことであります。

2番目の課題としては歴史事件と人物に対する評価の問題です。

我々が校史を編纂する中で、1つの事件あるいは1人の人物に関してさまざまな意見、さまざまな評価があるんですね。これが作業の難航する原因です。

1つの例を申し上げますと、上海交通大学の前身である南洋公学が設立した当初、アメリカ宣教師の福開森（John Calvin Ferguson, 1866～1945）が、南洋公学で教員として授業をしていました。教員の海外派遣とか学生のアメリカ派遣とか、いろんな良いことをやってくれました。当時

の評価は非常に高かったんですが、現在では彼はあくまでも宣教師であったとか、批判もいろいろあります。その中で批判と評価をどういうふうにするか。3分が評価・7分が批判なのか、それとも7分が評価・3分が批判なのか、これは非常に難しい問題であります。

それから、もう1つの例を申し上げます。これは上海交通大学の前身校南洋公学の設立者である盛宣懐です。彼は南洋公学と北洋大学を設立した人物で、非常に貢献が大きかった。この人物にさえ批判的な評価もあります。たとえば、この人は実業家であって教育者ではないとか、あるいは半分が教育者で半分が実業家だとかいうことで、評価の高さ低さにばらつきがあってまとまりにくい。評価や批判をどういうふうに校史の中に反映するかということはさらに難しいです。

これらをまとめてみますと、校史の編纂は事実に基づくこと。主観的な判断はなるべく避けるようにしております。

3番目の課題は校史の全体性のことです。

全体性の問題に関わって言いますと、長い歴史の中でその流れのメインを掴んで全体性を反映することが非常に大事です。

たとえば多くの学長が教育の理念を持ったり思想を持ったりしますが、それは人によって全然違います。その中でメインになるもの、最終的な目的はいったい何なんだろうという、それを見出すのが非常に重要であり、かつ難しいことです。

校史というのは繋がってる歴史ですから、その全体性を考慮した上で、1つ1つの断続性にこだわるのではなくて、それを全部連結させる、貫くような歴史を書かないといけない。大学の役割とはいったい何だろうかと言うと、人を育てる、教育というのが1つの意見です。もう1つは科学研究をメインにすべきであるという、これが2番目の意見です。

3番目に社会的貢献。これらの3つの課題あるいは役割、大学の在り方についても、いろんな意見があります。これをどういうふうに全体的に把握するかというのは非常に難しい問題であります。

4番目の課題は校史の研究をどういうふうに発展させるかということです。

校史というのはただ事実の羅列ではなくて、事実に基づいて書いた後にその規律性、歴史的教訓、その中から得るものをどういうふうに反映させるかということが非常に重要ではないかと思います。

その中で1つの規律性とか普遍性を持つものが必ずあると思います。それは羅列によって出てくるものではなく、その中から汲み上げないといけない。読み取らないといけないですね。

110年の大学の歴史の中で普遍的なものがどういう規律をもって発展してきたのか、それをきちんと掴んで理解して、現在の教育にどのように生かすかが非常に重要です。

我々は5～6年の時間を使って校史を編纂してきましたけれども、これは初歩的なものでありまして、これが本当に正しいかどうかまだたくさんの疑問を持っています。それをどういうふうに修整していくかが非常に大きな課題です。

現在執筆中の『上海交通大学史』をいつ出版するかについては、まだ目処が立っておりません。それよりも大事なのは校史の中身・質を保証しないといけないというのが、我々の責任です。

今日は上海交通大学の校史の編纂について自分の意見を述べてきました。校史の編纂というのは非常に困難な作業でありまして、時間もかかりますし資料の問題もあります。私は単に自分の意見を述べただけでありますが、以上をもちまして今日の講演を終わらせていただきます。残りの時間で皆さんといろいろ意見交換をしていきたいと思います。どうもありがとうございました。

【司会】 どうもありがとうございました。ただいまの葉先生のご発表は、上海交通大学の経緯と言

いますか由来と言いますか、とりわけ交通という名前をキーワードにして、今日の大学発展に到るプロセスをお話しいただきました。そのもとで現在進んでいる上海交通大学史の編纂に当たり、非常に示唆に富んで興味深い、あるいはさらに学問を踏まえた上での大学史の存在をいかに客観的に正当化していくかという中身のお話をしていただきました。ともすると大学史というのは自画自賛的な形に終始するケースが見られるわけですが、先生のお話はそうではなくて、いろんな議論や見方を踏まえながら、いかに客観的な形で校史を編纂したらいいか、すべきかということで、事例を交えながら説得力のあるお話をしていただけたと思います。

私もお話を聞きながら、本学の場合はこうしたらいいかなとか、こうしたらもっと良くなるのかなとか、我々記念センターのことも踏まえていろいろ頭の中にピリピリと刺激を受けました。そういう点で今日は刺激的なお話を聞きました。大学史と言うと何となく大学の付属物みたいな感じに捉えられておりますけれども、今のお話を聞きますと、正に大学の中の本道と言いますか、大学の過去現在未来と言いますか、将来を展望する重要な役割を果たしているという点で、我々も意とするところが大きかったというふうに思っております。せっかくの機会ですから、どんな部分でも構いませんのでご自由にご意見やご質問をお願いできたらと思います。よろしくお願いします。お名前と、お差し支えなければ所属もお願いします。

【ヒラタ】 たまたま機会があって東亜同文書院と愛知大学の歴史などを新聞に発表させていただいたことのある平田超人と申します。よろしくお願いします。私はかねてから私共の日常使わしていただいてる漢字が、こうやって見ると本当に同じ文字（少し違うところもありますが）で、何千年にもわたって築きあげてこられた中国文明・文化の影響を潤沢に受けて私共の国の文明があるということを痛感しています。また今校史の編纂を、羅列的であったり自画自賛であったりせず、歴史学の目から学問と教育の良心という、広範な視野と深い視点で取り組まれていることに心から敬意を表する次第であります。

1つお伺いしたいことは、上海交通大学の110年の歴史の中で、中国は非常に大きな権力の変動があったと思うんですね。その時々の権力に対してもちろん大学は完全な学問の自由や大学の独立を貫き通せたわけではなく、おそらく権力に迎合したり、あるいは止むを得ず従ったりした、起伏の多い歴史であったかと思います。日本の東亜同文書院においても、国策によって、大学自体いかに自由闊達な学風があったとしても、やはり日本が当時持っていた国家の政策の中で動いたと思うんですね。私はこのあいだ越知先生が上海同文書院に伺った時、校門の下に「侵略者日本」という文字があったということを伺って、中国の歴史認識が私共のように簡単に忘れたり無くなってしまうものではなくて、根強くいつまでもあるというふうに思っております。それから私共日本の作った東亜同文書院と隣同士で接せられた時があったわけで、そうしますとその時に日本および東亜同文書院に対する光と影と申しましょうか、良かった面、評価される面と、逆に糾弾される面とがおそらく日常の学生同士の接触でもあったし、侵略者としての面もあった。さまざまな面があったと思いますが、その辺のことが1つと、それから上海交通大学そのものが110年の歴史の中で国家の権力に対して学問の独立をどう守ったのか、あるいは大学の位置がどうであったのか、というような側面をお話しいただければありがたいと思います。長くなりましたが。

【葉】 まずヒラタ先生ご質問どうもありがとうございます。学者間の学問の自由というのは非常に大事でありまして、こうして自由に意見交換できることを非常に嬉しく思います。大学の存在とい

うのは、社会あるいは社会経済の環境から脱することはできないですね。

たとえば大学史の編纂の中で1つ直面した問題は、まず時代区分の問題です。当時はこの時代区分を出す前にいろんな意見がありました。上海交通大学の歴史は3つの時代にまたがってるんですね。その3つの時代の社会的環境に沿って時代区分をするべきだという意見が多かったんです。それを乗り越えて我々は大学の歴史という時代区分をそれなりに整理しました。それが先ほど申し上げた8つの時代区分です。

上海交通大学の校史の中で東亜同文書院と関連して先ほどおっしゃったような、大学の校門のところに「侵略」と書いてあったというようなことは絶対に無いと思いますよ。私の知る限りではそれは無いんじゃないかなと思いますけど。藤田先生も上海交通大学に来られたことがありますので、絶対無いと思います。

【司会】 確かにそこには無いですね。まあそういう文書がちょっとあるのは、昔の図書館を現在博物館にされてて、交通大学の大学史の今おっしゃってるような発展期、それから戦時中のところへ来たところで、交通大学の校舎は同文書院に占拠された、そういう文面は展示の中にありました。ここには無いですね。

【葉】 校門のところには絶対無いということを確認できたと思います。あったとしたら我々の大学の博物館の中で、校舎が東亜同文書院に占拠・占用されたことは確かに書いてあります。日本軍が中国を侵略した後に東亜同文書院が我々の交通大学を占拠したという事実は確かに書いてあります。今日は意見交換ですから自由にできるので、これはとりあえず置いといて、まず東亜同文書院が交通大学を占拠したかどうかについて、私達は校史を編纂する段階でいろんな資料を確認したところ、確かに東亜同文書院は借用したということはあるんですね。しかし問題は借用する文書を誰に出したかという問題です。それは日本の軍部と外務省です。当時交通大学は日本の憲兵隊に占拠されたんですね。東亜同文書院は外務省と軍部に、借り入れるという願いを出したわけであります。直接上海交通大学に対して借用の願いは出してないわけです。ですからこういう問題が出てくるわけです。

昨日は日中大学フォーラムがありましたけれども、その中で華中理工大学の学長が1つ良いことを言ってました。日中大学間の交流の中でも民間の交流の中でも、どうしても歴史の問題に直面し、歴史問題がネックになるんですね。関係が発展していくことに対して。彼は「歴史は歴史でありまして、それを事実として認めて、これからの発展を考えないといけない」と。歴史をある程度認識して、これからの関係を重視することが非常に大事なことではないかと思います。

学問的な自由、あるいは学術的な議論はまず自由がないといけない。特に文系では。いろんな意見が出て非常に嬉しいことであります。意見交換していく中でそれを修整していく。議論の中から生まれていくことが非常に大事であり、そういう場を提供することはさらに大事です。

皆さんは中国についていろいろ知ってると思いますが、この場を借りて私は中国における大学に関する2つの概念、まず「211」と「985」という概念について話をしたいと思います。

まず211。21世紀における100の大学を選定して、その中の特徴のある専門学科を世界レベルまで育てることです。これは全部中国の教育部が管轄しておりまして、まず大学の基準が定められ、この大学は211を申請してもいいということを決めるんですね。採択された後に国からたくさんの補助金が入りますので、これが大学の発展のために非常に重要な意味を持つんですね。今は109の大学が採択されてまして、国がたくさんのお金を注ぎ込んでおります。

211だけではちょっと足りないので、次に出したのは「985プロジェクト」です。なぜ985かという疑問があるかと思いますが、98年の5月という日付を付けたわけであります。211は1つの学科、あるいは1つの専門が世界的な水準に達することを目標として掲げています。985というのは、1つの大学を世界的なレベルまで育て上げることが大きな目標です。

この985の補助金の額はさらに大きいです。これも教育部が専門家会議を設置して宣伝しております。最初にこのプロジェクトに採択されたのは9つの大学でした。

上海交通大学は211にも採択され、同時に985にも採択されております。これは何を表しているかと言うと、交通大学は非常に良い大学でありまして知名度の高い大学であることを証明しています。これはついでにちょっと紹介しておきたいですね。

次に何か質問があれば。

【司会】 他にいかがでしょうか。はいどうぞ。

【小池】 私の質問は、いつ日本語教育が始まりましたかということと、日本語教育の現状はどうですかということです。

【葉】 日本語の教育について、上海交通大学には外国語学院がありまして、その中に3つの専門があります。1つは英語、1つは日本語、もう1つはドイツ語であります。人気のある順番ですと英語と日本語とドイツ語です。教員に関して言いますと、英語はかなり経験を持った教員が多数を占めております。日本語の教員は若手が多いです。日本語の教員の多くは海外、特に日本で博士号を取って教員になったケースが多いですから、全体的にまだ若い教員が多いということです。毎年の定員は100人ぐらいです。我々の交通大学は愛知大学と友好関係を持つ協定校ですが、私と藤田先生の関係だけではなく、将来的に交通大学と愛知大学は日本語教育の交流もできるかと思います。その点については佐藤学長と我が校の張学長が会談をしていますので、そういうビジョンも持っておられるのではないかなと思います。これからも交流をさらに促進していきたいと思います。小池先生ももし機会があれば、ぜひ交通大学の外国語学院の日本語学科に来ていただいて、実際に交流されたら、さらに理解を深めることができるんじゃないかと思っております。

今上海で日本語教育の専門を設置する大学は非常に多く、交通大学はその1つでありますが、一番有名なのは上海外国語大学です。その日本語学科は非常に高いレベルであります。上海の大学はほとんど日本語教育にも力を入れています。

【大島】 よろしいですか。

【司会】 はいどうぞ。

【大島】 先生今日はお話ありがとうございました。大変参考になりました。不肖私は今から5年ほど前、この愛知大学の50年史を、短期間ですが編纂させていただきました。今日承りましたお話ですと、私はもうちょっと公式的（フォーマル）なお話をされるのではなかろうかと思ったんですけれども、お話を聞かせていただきますと、非常に学問的に、あるいは科学的に校史（大学史）を編纂されようとしていることを聞いて、いささか驚いております。今日お話しになられました幾つかの点は、たとえば資料を広く集める、それをよく批判的に検討する、等から始まりまして、歴史事件と人物評価の問題もやると。そして全体として貫かれた1つの方針で歴史を書く、等々ですね。これは私共が10年前から5年前にかけて、いや15年前から10年前にかけて本当に悩んだ、苦しんだ問題を、我々が悩んだよりもより深く、より広範に取り組まれている様子を伺いました。まずその

ことを感想として申し上げます。

私共が愛知大学史を編纂する前に研究会を開き、ある有名な先生をお呼びして、大学史をいかに書くべきかということをいろいろ討論したんです。その時の１つとして、どこの大学でも本当に順調に発展してきたような大学は少ない。無いと言ってもいい。みんないろんな問題を抱え、困難を抱え、それを乗り越え乗り越えて発展してきたんだと。従って本当は自分達も、調べるのも嫌、書くのも嫌だというような問題でも、それをちゃんと隠さずに記述して、その克服をいかにしたか、いかに解決したかということを書かなければならないと。こういうことを言われたわけです。私達も実は愛知大学の草創期から今日に到るまで、いろんな問題を次から次に抱えたわけです。最初は財政問題、次に学生と警官隊がぶつかった愛大事件、山岳遭難事件、それからさらにいわゆる大学紛争（これは全国で起こりました）、それから三好校舎選定とその移転問題。次から次に困難が起こりました。それらを本当はもうさっと流したいんだけれども、必要なので書きました。ただし時間はかかったけれどもあまり権力の力を借りずに、基本的に自分達の力で克服したんだということを書いたんです。だから大変分厚くなり、しかも読んで面白くないものになってしまいました。まあこれは反省でもあるわけですけれども。

そこで上海交通大学について１つだけお聞きしたいのは、文化大革命の時に、中国全体の大学が非常に混乱した。それから10年間学生を募集しなかったということを聞いております。そういった問題は、全国的にどのように収拾されていったかということは我々もだいたい聞いて知っておるんですが、大学レベルで大学の構成員の教授や学生が、特にその収拾の問題にどう取り組んだかというのをお書きになるのかならないのか、お書きになるとすればどういう形でお書きになるのか、その点を１つ質問させていただきたいと思います。

【葉】 上海交通大学の110年も正に、発展の中でいろんな困難がありました。それは愛知大学と同様です。他の大学も全部こういう問題に直面しているかと思います。文化大革命について言えば1966年から10年間で、これは大学から始まったわけですが、非常に難しい問題があります。我々はこの文化大革命の歴史を、主に４点に重点を置いて書きました。１つ目は文化大革命は全国レベルのものでありまして、他の大学もその被害に遭われてますね、交通大学だけではなくて。ですから文化大革命そのものに対しては詳細に書かないということが第１点です。２番目としては文化大革命の被害を被った部分、あるいは迫害された知識人に対して詳細に書く。これはあってはならないことですから、かなり詳細に書きました。３番目としては10年間の歴史の中で大学は全体にどういう影響があったのか、それも書かないといけないことです。４番目としては教育そのものに対する被害です。学科の設置とか、人材の育成まで被害が及ぶわけですので、それを全部含めて詳細に書くことにしました。これは大学の発展の歴史の中で非常に残念なことでありまして、歴史の教訓としても、大学の将来の発展のためにも非常に重要なことでありますので、詳細に書かないといけない部分です。これが現代に及ぼした影響までも書いております。こういう教訓を忘れてはならないというスタンスに立って、その被害を強調しながら書きました。

この部分の文章の内容は過去10回ぐらい直しています。各先生方に渡して見ていただいて、いろんな意見を伺ってますが、10回以上直してもまだ完全原稿としてはできあがってこないですね。これは１つの難しさを表してるのではないかなと思います。

例えば、学生について言えば、先生を引っぱり出して批判することをたくさんやりました。その行動自体に対してどういうふうに評価するか、あるいは批判するかについて、これも難しいこと

でありまして、我々の認識としては学生は当時若かったし、大学の運動に対する認識も甘かったし、曖昧な部分はたくさんありました。大きく考えると学生も1つの被害者の中に含まれるわけですので、それをどういうふうに扱うかというのは非常に難しいですね。ですからそれをあまり書かずに、簡単に触れることにしようと心がけております。

【大島】 分かりました。ありがとうございます。

【司会】 ではあと、いかがでしょうか。

【山下】 もと愛知大学職員の山下と申します。今日葉先生の素晴らしいお話を伺って感動いたしました。特に日中戦争の時に東亜同文書院の学生諸君と上海交通大学の学生諸君が手を結んで反戦運動を戦ったという事実関係にまで触れていただいたので非常に嬉しく思いました。東亜同文書院というのは確かに日本軍部、日本の支配層のもとで大学が運営されたことは間違いないわけですけれども、しかし海外にあった大学であり、言ってみれば総体的な独自性を持ってたと思うんですね。だから一口に帝国主義の手先としての東亜同文書院大学ではなかったというふうに僕は思っています。その大学の設置者の意図、権威者の考え方とは別に、そこにいた教職員、学生達はやはり中国を愛し、中国人民と手を結んでいこうという、そういう気持ちは持っていたと思います。卒業生の人達にいろいろ話を聞いてみると、そういうことを多く語っています。食糧調達で農村へ行った時に、泣きながら通訳をしなくちゃいけなかったという苦心談とか、そういうことを卒業生の人達から、先輩達から僕は聞いております。そういう意味では、今この時期にこういう形で日中の上海交通大学と愛知大学が手を結んでいる状態は、書院の人達も非常に喜んでいらっしゃるんじゃないかと思います。質問とかそういうのじゃなくて感想ですが、先生が日中戦争の時期に触れられ、そのお話を伺って、感銘を受けました。以上です。

【葉】 山下先生の話を聞いて私も共通した話題ができたことを非常に嬉しく思っております。私がこういう友好関係を維持していくことが非常に良いことであると切実に思っております。どうもありがとうございます。

【イモト】 いいですか。

【司会】 はいどうぞ。

【イモト】 僕は昭和16年（1941年）生まれで、義務教育しか出てないイモトと言います。縁があって愛知大学の学生さんとお付き合いさせてもらい、またアパートを中国の留学生に貸しております。その中で留学生の人達を今メインで預かっています。緑と土のある豊橋の校舎と、2年先に移転予定のある鉄とガラスの名古屋の校舎に移転することになりますが、そういう観点から先生の場合はどう思われますかという点と、できましたら次に上海交通大学の生徒さんが愛知大学の豊橋校舎へ来られて、僕のアパートとご縁を作りたいなと思うんですけどどうでしょうか。その2点をお願いいたします。

【葉】 まず中国の留学生の面倒を見ていただいて本当にどうもありがとうございます。日本と中国の学生という関係で言えば、日本政府は30万人の中国人留学生を受け入れる計画をしていますね。私の周りでも上海で言うと、海外に行く学生の中で一番多く行くところは日本とアメリカです。将来的にたぶん日本に来る中国人はさらに増えると思います。その中でイモトさんが下宿の関係でいろいろ面倒を見てあげてください。日本に来る学生の中にもいろいろ格差があると思います。裕福な家庭の子もいれば農村出身の子もいます。その中で良い条件の部屋もあればまた条件の

悪い部屋も、いろいろ提供してあげていいんじゃないかなと思いますので、これからもよろしくお願いします。

【司会】 どうもありがとうございました。ほぼ4時になったんですけど、あとどなたかございましたら簡単でいいんですが。はい。

【李】 学長だけじゃなく教員、それから学生についても重点的に書いたということですが、取り上げられた卒業生にはどのような人達がいたのか。交通大学の卒業生にはけっこう歴史的に有名な人が多いので、それを簡単に紹介していただければと。

【葉】 交通大学は今までに26万から27万の卒業生がいます。その中で蔡_とか、銭学森とか、呉文俊とか、いろんな人材を輩出しております。航空技術とか、経営者もたくさんおります。以前交通大学の卒業生は、就職する時に交通大学出身というだけで就職が非常に簡単だったんですね。いろいろな卒業生がいますが、この言葉が特に重要です。「学生諸君によく言うのは、今日は君達は交通大学の学生であることを誇りに思ってください。明日社会に出たら我々交通大学は逆に君達を育てたことを誇りに思う」。卒業した後も交通大学の名前を持って社会に貢献することは非常に大事であるということ。これは交通大学でよく言う1つの言葉です。

【司会】 ありがとうございました。今日は長時間にわたって講演会を行ないました。4時過ぎになって、予定した時間がまいりました。今日は葉先生に非常に多くの示唆に富んだお話を伺うことができ、皆さんのご意見もそれに即した非常にいいご質問、あるいはご意見をいただいたと思っております。そういう点では今日ご出席いただいた皆さん方にも我々のほうから厚くお礼を申し上げたいと思います。

なお最初にご紹介するのを忘れましたけれども、見事な日本語の通訳をしていただいたのは暁敏さんです。本学の経済学部から中国研究科の修士・博士課程を歩まれまして、昨年の3月に博士の学位を取られました。あまり個人情報を言っていいのかどうか分からないけれども内モンゴルご出身でフフホト近くにお住まいでした。元の出身は北のほうのフルンボイルで、そのフルンボイルの戦前における経済状況を解明に分析したという点で博士号の学位を取得したとお聞きしております。そういう点では今後非常に期待される人材だと思っております。本当に日本語がお上手で我々よりも上手だから、私もいつも敬意を表しています。こういうチャンスがあるとお願いしているので、ご本人も大変だと思うんですが、これによってまた成長するということもあろうかというわけでございます。

葉先生は26日に愛知大学に来られて、授賞式を済ませて27日に東京へ日帰りの予定でした。ところが先ほどから話に出てる日中大学フェアというのがあって、本学もその中に入ったと上のほうから急に言われました。日本は49大学、中国は40の大学が一堂に会して、東京フォーラムという有楽町と東京駅の左側にあるばかでかい施設（行ってみて私もびっくりしましたけれども）の地下の大きなフロアで、各大学が9平米の持ち分に今後の日中間の大学提携のための展示会をやるから出ろという命令です。降って湧いたような話で、表彰式と重ならなくて良かったなと思ってるんですけれども。その代わり向こうからは上海交通大学の副学長とか上海大学の副学長がお見えになる。両大学とも展示施設を持ってるから本学と良い提携関係が持てるなと。愛知大学も記念センターを始め、中国研究の辞典も出すというようなことなので、葉先生に無理にお願いしてもう一両日居ていただき、上海交通大学や上海大学の学長さん達がお見えになったら愛知大学のブースに呼んでいた

だいて、葉先生にうまく両校との提携をお願いしていただくという大役を、どさくさに紛れてお願いしちゃったわけです。

本当は昨日・一昨日とこの豊橋周辺でゆっくり休んでいただいて、どこかツアーで楽しませてあげようと思っていたんですけれども。我々にとって当面の大きな目標には交通大学とのより一層の友好関係ということがございます。東亜同文書院大学の歩みとの関係で言いましても非常に大きな接点を持っている大学でありますので、そういう点でも葉先生にお願いして昨日はその役割を果たしていただいたということで、大変ありがたく思っております。ところが帰ろうと思ったら昨日の新幹線が大変なことになって、東京駅で夕方までずっと会議に出られていたそうで、むしろそれが良かったと思うんですけど、お昼だったらえらいことだったと思います。2時間東京駅で待たれて、

【葉】 2時間半です。

【司会】 2時間半ですか、それでしかもあわてて乗ったためにコートを忘れてしまったということがございまして、大変申し訳ないことをしたんですが、幸いにも息子さんが明日、東京に見えてそのコートを受け取っていただけるというところまで話が進んだので安心しております。おかげで夕べは9時過ぎですか、豊橋へ着いたのは。

【葉】 9時半です。

【司会】 9時半ですか、失礼しました。ということで実は大変お疲れだったんですね。大役を果たしていただいてまたその上、日本で極めて珍しい新幹線の事故に遭遇された。貴重な経験ですよということを申し上げましたら、「いや、大局的には非常に良いんだから、ごく一瞬のできごとだから問題はない」というふうにお答えいただいて、やっぱり我々もそういう度量が要りますね。そういうことを痛切に感じました。今日は卒業生のお話などもありましたが、我々も大学史の展示施設を設けて、かねがね気になっているのは本学の卒業生の人達の活躍です。大学の先生の分はパネルに少しありますけれども、クラブ活動でも非常に多くの貢献をし、活躍したクラブがある。学生諸君に来てもらうためにも、今後そういう人達のきちんとした展示も考えて、学生諸君に1つのイメージを作ってもらえるような展示の工夫も要るかなというようなことを今日のお話で改めて感じました。まあそういうことで、明日から葉先生はまた東京へ出られたりして大変お忙しいんですけれども、この1週間は葉先生と共に大変変化に富んだ毎日を過ごさせていただきました。上海に帰られたら今度は平穏な日々をお過ごしになりますように期待申し上げまして、私の最後の挨拶とさせていただきます。どうも今日は本当に長時間ありがとうございました。

東亜同文書院大学記念センター公開講演会

上海交通大学史の編纂をめぐって

日時　2010年1月30日（土）13：30～16：00

会場　愛知大学豊橋校舎　本館5階会議室

豊橋鉄道渥美線「愛知大学前」下車すぐ

講師　葉　敦平　氏

（上海交通大学教授）

上海交通大学は中国での鉄道技術研究や同技術者を養成する日本でいえば工業専門大学でした。その創立時の名前は「南洋公学」と称し、「南洋大学」となりました。東亜同文書院の設立の直前に開学し、中国の大学史では最も古い大学のひとつで、今日では重点大学になり、文系学部も加わり総合大学へと発展しています。書院がそれに隣り合って立地した時代、戦時中その校舎を借用した時代と書院とのかかわりのある大学です。

この上海交通大学は現在120周年の大学史を編纂中です。今回はその校史編纂室の代表である葉先生をお迎えし、校史編纂の目的や方針、背景、具体的な構成作業などについて、中国における大学史編纂の特色を講演していただきます。なお葉先生はこのほど第16回東亜同文書院記念賞を受賞されています。

※講演は中国語　日本語通訳あり

お問い合わせ

愛知大学東亜同文書院大学記念センター／オープン・リサーチ・センター
〒441-8522 豊橋市町畑町1-1 電話 (0532)47-4139 FAX (0532)47-4196
愛知大学豊橋研究支援課　Email tshien@ml.aichi-u.ac.jp

入場無料
どなたでもご自由にご参加ください

事前申込不要